今月の谷口雅春先生のお言葉

# 手伝いは子供の生命と愛を引き出す

## 子供には大なり小なり仕事を与えなければならない

子供に仕事をさせてはいけないというのは謬見である。適当な分量の仕事は子供の生命の生長に欠くべからざるものなのだ。仕事は子供の生命の生長に欠くべからざるものなのだ。仕事は生命を建設的に使用する方法を教える。そして子供の生命のうちに建設的な傾向と創意的な傾向とを育てあげる。

建設的傾向――これは才能の発達の土台石となるものだ。この傾向が強ければ強いほどその人間は生長する。幼時に培われた傾向は生長してから養成した傾向よりも力強く根を張るのだ。

だから、幼時より生命を何か建設的な方向に鍛えることが必要である。それには大なり小なり仕事を与えなければならぬ。

（新編『生命の實相』第22巻86～87頁）

## 子供の手助けは、喜んで感謝して

子供が仕事を嫌がるというのは嘘だ。無理に命令的にさせないで、自分の好きな仕事をやらしてやるならば、子供が仕事をしたがらないということはない。

女の子は特に仕事を好む。生れつきの愛の性状が手助けを好ませる。もう三、四歳にもなると母親の仕事の手助けをしたがって仕様がないであろう。させるが好い。が、仕事は徐々に慣らすが好い。急いではならぬ。そして、子供の手助けを真に喜んで感謝してやるようにすれば、子供は「愛は感謝を受ける」という事実を体験する。喜ばれることがどんなに嬉しいかということを体験する。これは人間の正しい生長に必要なことである。（中略）

子供に仕事を与えるのを単に親の手助けをさすという意味ばかりでするのは間違である。親の利益を標準とする時、子供の不完全な仕事は親をイライラさせるものである。子供は仕事をしたために喜ばれるよりも呶鳴り付けられるようなことがある。それはやがて仕事に対する興味を失わすことにもなり、子供自身は愛の心で手助けしたことが感謝で報いられないことにもなり、情操教育の点から甚だ面白くない結果を来たすのである。

（新編『生命の實相』第22巻87～89頁）

## 子供の手伝いに功利や実用を求めてはならない

生まれ出たままの続きのように感じられる幼児期では、本当に吾れと幼児と一体のような自覚があったために本当の教育ができたのでありますが、相当子供の身体が大きくなって来ますと、なんとなしに別個の存在であるような分離の感じを持って来て、自然にこのコップの転覆るのを見せて「そら、コップ。コップが転覆ったでしょう。そら、水が零れた。零れた水を拭きましょう。そら拭いた」というような塩梅式の、一つ一つ子供が自分の内部から知ろうとし、出そうとしているものを引き出すような教育ができなくなる。そして今度は、「そんなことしていたら、台所がうるさいからあっちへ行きなさい」と、せっかく、子供が内部にもっていて引き出してもらいたいものを、「うるさい、うるさい」と撥ねつけるようになる。この撥ねつけるようになるのは、親の方が児童と一体感を失って功利的になってくるからで

す。役に立つとか、役に立たぬとか、経済的とか、実用向きとか、そういう標準で子供を排斥して、子供のまさに芽吹かんとしている生命を引き出すことを怠ることになるのであります。このせっかく今引き出されたいと子供の生命が内部から溢れ出て、これを手伝いたい、菜っ葉を截りたいというふうな、内部から溢れ出てくるものを抑えて脇へ除けてしまうというふうなことになる、これは教育が手段に征服されたのであります。教育が生活そのものにならないで、あることの手段になる――ここに教育の堕落があるのであります。

（『生命の實相』頭注版第28巻94～95頁）

## 子供の生命が溢れ出している「今」を生かす

手段でなしに「今」を生きさす――「今」生命が溢れ出して「こうしよう、こうしよう」「こうしたい、こうしたい」と、樹木の新芽のようにまさに内部から溢れ出ようとしている時に児童の生命を生かすというふうにしたならば、人間の内部に流れている能力が十分に発達するのです。このなんとなく母親の台所仕事の手伝いなんかしたいという時には、単に能力が発現しているだけではなしに、愛の心が動いている、自分からして、母親を喜ばしてあげたい、という愛の心が起こっているのだけれども、親の方では実用一点張りで、そんな愛を受けたって時間がかかるばかりである、邪魔になってかえって仕事が運ばないと、愛の心を功利的価値で計算して、実用一点張り、経済向き一点張りで片づけてしまおうとする。こうなると、せっかく愛の心で「親たちの手助けをして上げたい」という生命の働きが動き出そうとしている時に、その生命を押し込めてしまうということになる。そして、青年期になってからその子供に「ちょっとわたしの手伝いをしておくれ」といっても、もうその子供は手伝いをする喜びを、その最初の芽生えにおいて摘まれてしまっているのです。（中略）

こういうふうに児童の成長の経過中に、その時その時に「今」でないと発達しないというふうなことがあるのです。

（『生命の實相』頭注版第28巻95～96頁）